

大阪市住吉区

南住吉遺跡発掘調査報告

Ⅱ

市営南住吉住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会



南区深掘り北壁地層断面(南から)

大阪市住吉区

南住吉遺跡発掘調査報告

Ⅱ

市営南住吉住宅建設工事に伴う発掘調査報告書

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

南住吉遺跡は大阪市南部の住吉区と東住吉区にまたがる縄文時代から江戸時代にかけての遺跡で、西方には国家的な港津である「住吉津」を擁し、古代には住吉大社や津守庵寺などの寺社が造営されるなど、摂津国(職)住吉郡の中心に立地していたと考えられる。

今回の調査では古代から中世、あるいはそれ以前のものともみられる遺構が検出されたほか、飛鳥時代から奈良時代にかけての土器などが出土した。これまでの調査では「住吉津」に関する有力氏族の屋敷地の可能性がある、飛鳥時代の大規模な建物群が発見されており、今回出土した遺物も当時の人びとの活動の一端を示すものであろう。

また、本報告では大阪市城南部の古地理の変遷を明らかにする作業の一環として、当遺跡の層序を再検討するとともに、当遺跡から山之内遺跡を経て長原遺跡に至る層序の対比を行った。当遺跡においてこれまでに調査された部分は、遺跡全体のごく一部であるが、遺構の分布域と、地層の堆積状況からわかる地理的な環境を対比検討することで、当遺跡の実態がより明らかにされていくものと期待される。

最後に、発掘調査および報告書作成にご協力を賜りました、大阪市住宅局ならびに周辺住民の方々を始めとする関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

2002年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は財団法人大阪市文化財協会が大阪市都市整備局(現大阪市住宅局)の委託を受け、1999年6月から7月にかけて住吉区南住吉2丁目で実施した南住吉第6住宅建設工事に伴う発掘調査(MN99-9次、MNは南住吉遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市都市整備局の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長京嶋堂の指導のもと、同課小倉徹也が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅱ章第1節に記した。
- 一、本書の作成は研究資料課報告書作成室長松尾信裕の指揮のもと、2001年4月1日から2002年3月29日にかけて行った。本文の執筆は調査研究部副主幹田中清美と小倉が分担した。英文要旨の作成はアメリカ合衆国ワシントン州立大学のMatthew W. Van Pelt氏と学芸部学芸課学芸第1係長岡村勝行がこれを助けた。編集は小倉が担当した。
- 一、第Ⅱ章第3節2)の上器については調査課大庭重信が、第Ⅲ章については研究資料課資料係長趙哲済が協力した。
- 一、遺構写真は小倉が撮影し、遺物写真の撮影は内田真紀子氏に委託した。
- 一、基準点測量は朝日航洋株式会社に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡 例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲清1995b]に準じる。また、本書で用いる基本層序の地層名は地層番号の前に「南住吉」を付して「南住吉○層」とし、図表等では南住吉遺跡の調査略号である「MN」を付して「MN○層」あるいは「MN○」とした。
2. 遺構名の表記は、土壌(SK)の分類記号の後に、本調査次数の番号を付している。なお、自然流路には分類記号を与えず、そのまま遺構名とした。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±○m」と記した。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国上平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の立地と既往の調査	1
第1節 遺跡の立地と地形概要	1
第2節 既往の調査	5
第Ⅱ章 MN99-9次調査	7
第1節 調査の経緯と経過	7
第2節 層序	8
第3節 遺構と遺物	13
1) 遺構	13
2) 遺物	13
第Ⅲ章 調査成果の検討	15
第1節 南仕古遺跡の基本層序	15
第2節 周辺遺跡との層序対比	21
第3節 まとめ	25
引用・参考文献	27

あとがき・索引

英文目次・要旨

報告書抄録

図 版 目 次

1 調査地遠景と出土遺物	3 地層断面(二)と第2b層上面検出状況
上：調査地遠景(東から)	上：南区深掘り北壁地層断面(南から)
下：第2a層出土遺物	中：北区第2b層上面検出状況(南から)
2 地層断面(一)	下：南区第2b層上面検出状況(西から)
上：北区西壁地層断面(東から)	
中：南区北側溝南壁地層断面(北東から)	
下：南区西側溝東壁地層断面(北西から)	

挿 図 目 次

図1 南住吉遺跡の位置	1	図10 南区中央側溝東壁地層断面図	11
図2 大阪平野とその周辺の地形分類	2	図11 SK201平・断面図	13
図3 周辺の遺跡	3	図12 第2b層上面検出遺構平面図	13
図4 過去の調査地と立会調査の位置	5	図13 出土遺物	14
図5 調査区配置図	7	図14 遺跡周辺の旧地形と柱状図の位置	15
図6 調査地模式柱状図	9	図15 南住吉遺跡の柱状対比図	16・17
図7 南区北側溝南壁地層断面図	10・11	図16 柱状図の位置	21
図8 北区西壁地層断面図	10	図17 大阪市南部地域の柱状対比図	22・23
図9 南区西側溝東壁地層断面図	11		

表 目 次

表1 おもな既往の調査一覧	6	表3 南住吉遺跡の基本層序	18
表2 調査地の層序	8		

第1章 遺跡の立地と既往の調査

第1節 遺跡の立地と地形概要

南住吉遺跡は大阪市住吉区南住吉を中心とし、大領・長居・長居西・長居東・苅田・我孫子東・我孫子・我孫子西・東住吉区長居公園にまたがる南北約1km、東西約1.5kmの楕円形の範囲にある。縄文時代から江戸時代の複合遺跡で、北部に戦国時代末期の城館址と推定される寺岡砦跡を半ば包括している(図1・3・4)。

本遺跡は東の河内平野と西大阪平野を分けて、ほぼ南北に延びる上町台地の南部に位置している(図2)。上町台地は大阪城付近を北限とし、大阪市南方にいたる南北10km余り、東西幅2～3kmの洪積段丘である。その台地面は大阪城から天王寺にかけてはTP+25～15m、天王寺より南ではやや高度を下げてTP+15～10mとなり、大和川以南では徐々に高度を上げて泉北丘陵につらなる。台地西側は急傾斜で落ち、あるいは崖を成し、西大阪平野と埋立地を経て大阪湾にいたるが、東側は緩やかに傾斜して河内平野に没する。大局的には北から南へ、西から東へ傾斜する地形を呈している。台地西縁に沿って続く直線的な急崖は断層崖ではなく縄文海進時の波食崖と考えられており、上町断層はその西側を南―北から南南西―北北東方向に走っている。北への延長は千里丘陵西縁を南北に走る佛念寺山断層につながり、南へは堺市の大仙古墳以南で数本に分かれて、坂本断層や久米田池断層につらなる。これらを一連の断層群と捉えて上町断層帯ともいう。

台地上には現在も清水谷や細工谷など、谷の地名を残す起伏のある地形を呈している。本遺跡には中央部から西方へ流下する細江川があり、住吉付近では谷を刻んでいる。

上町台地上には本遺跡のほかにも多くの遺跡が存在している(図3)。以下、住吉地域の遺跡群について、各時代ごとに概観する。

中期旧石器時代では山之内遺跡でナウマンソウとオオツノジカの足跡化石が検出されているが、人類の痕跡はまだ発見されていない[大阪市文化財協会1998b]。

後期旧石器時代では西方に位置する住吉大社旧境内遺跡で、サヌカイト製のナイフ形石器の系譜をひく石核が採集されており[石神怡1983]、山之内遺跡でサヌカイト製剥片が平安神宮火山灰層(始良-Tn火山灰:AT)の下



図1 南住吉遺跡の位置

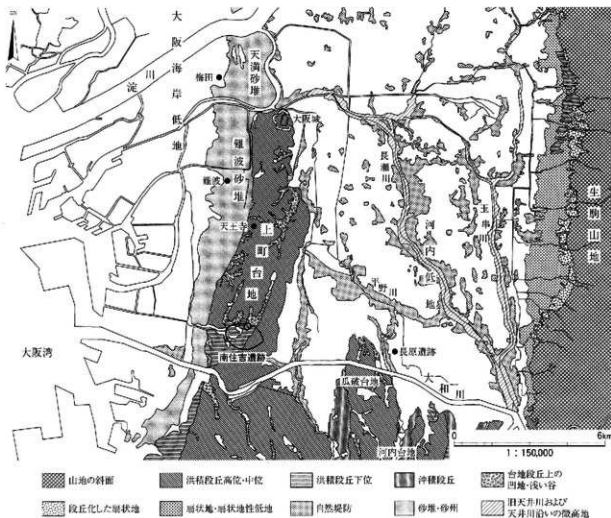


図2 大阪平野とその周辺の地形分類（土地条件図[建設省国土地理院1983]に一部加筆）

位から発見されている。また、後世の遺構からではあるがナイフ形石器が出土している[大阪市文化財協会1998b]。今後の調査によって石器製作址が発見される可能性もあろう。

縄文時代では遺構を伴わないが、本遺跡から石鏃が採集されている。また、山之内遺跡では前期にさかのぼる爪形文を施した土器や、晩期の滋賀里Ⅲa式土器・突帯文土器・石鏃が見つかった[大阪市文化財協会1998b]。

弥生時代になると本遺跡で遺構・遺物が認められはじめる。前期は遺物のみであるが、中期には数地点で集落に関連する遺構が確認されている。周辺の遺跡では、山之内遺跡で前期から遺構・遺物が見られるようになり、中期には飛躍的に増加して、遺跡南部を中心に住居跡や方形周溝墓が確認されている。しかし、中期後半になると遺構・遺物ともに減少することから、集落は衰退したと推定され、後期には遺構・遺物はごく少量しか見られないことから、この時期の集落は存在しないようである。山之内遺跡で集落が衰退する一方で、周辺の遺跡では後期の遺構が確認されている。遠里小野遺跡では円筒形の管状土鏝が出土し[藤岡謙二郎1942]、本遺跡の東側に位置する照ヶ丘矢田遺跡[古市晃・杉本厚典1997]や矢田部遺跡[大阪市文化財協会1998a]においても同じ頃の遺構が確認されている。

古墳時代中期にいたって、大阪湾を望む上町台地上に前方後円墳の帝塚山古墳がつくられる[大阪

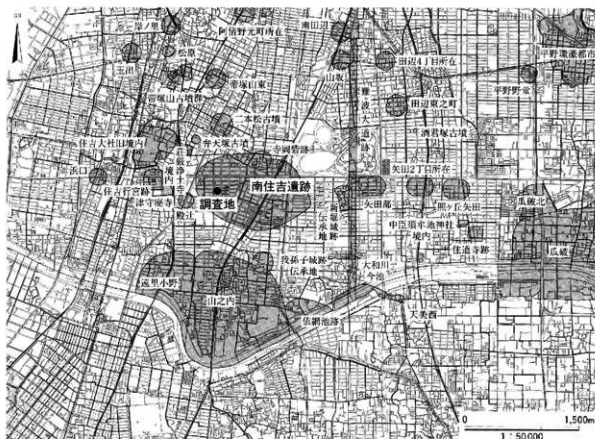


図3 周辺の遺跡 (『大阪市文化財地図』(平成13年度版)を使用)

市文化財協会1998a)。現在、大阪市内で墳丘が良好に残存している唯一の古墳である。山之内遺跡では竪穴住居や掘立柱建物・土壇などの遺構が検出されており、再び集落が営まれるようになる。古墳は確認されていないが、埴輪片が出土している。このほかに遊離資料ではあるが、円筒埴輪片が住吉大社旧境内遺跡[前田豊邦1983]や本遺跡で見つかっている。

古墳時代後期～飛鳥時代では山之内遺跡や遠里小野遺跡で多数の掘立柱建物群が検出されている。特筆すべきは遠里小野遺跡で発見された桁行15.4m、梁行13.8m、面積が212.5㎡もある巨大な掘立柱建物である。周囲には建物を中心に南北76m、東西94mの範囲に柵を巡らせ、建物を囲っている。規模が巨大であること、正方形の平面形をもち柱が太いことから相当の高さの建物と推定され、西側の海岸部にあったと推定される港湾施設に伴う、儀式などの特定の用途をもつ建物と想定している[大阪市文化財協会1999]。また、南住吉遺跡では6世紀の終わりから8世紀初めと推定される16棟の掘立柱建物群が検出されている。5時期にわたって建物が造られており、住吉地域における官人層の末端に連なる有力氏族の居住地と推定されている[大阪市文化財協会1998a]。

また、輪羽口や鉄滓など鍛冶関係の遺物やこれらを含む遺構が多く見つかったことは注目される。遠里小野遺跡では鏡状土製品・滑石製品など祭祀に係わる遺物が多量に出土しており、勾玉・管玉・白玉などの未製品や加工前の石材・剥片・チップなども数多く見つかった[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1994]。住吉大社旧境内遺跡から本遺跡北西部にかけての範囲には、6世紀後半から7世紀にかけて掘立柱建物群が形成され、荘厳浄土寺境内遺跡でも6～7世紀代の遺物が多く

採集されている[堀田啓一1979a・b]。また、白鳳期と推定される瓦片がこれまで山之内遺跡・遠里小野遺跡・津守廃寺[藤森栄一1967]で確認されている。

奈良時代になると本遺跡では遺構・遺物が僅少となるが、山之内遺跡では掘立柱建物が見つかったりしている。

平安時代以降では津守廃寺における発掘調査で9世紀後半～10世紀前半の井戸や、古代と推測される掘立柱建物が検出されている[高橋工1989]。莊嚴浄土寺境内遺跡では瓦が多数出土している[植木久1988]。また、山之内遺跡では掘立柱建物や溝などが見つかったりしているが、遺構・遺物ともに減少しており、本遺跡でもそれらの出土は散発的となる。

以上のことから、弥生時代までは本遺跡の南側、上町台地でもやや低い場所に当る山之内遺跡や遠里小野遺跡の周辺に遺構が多く、人間活動の痕跡がはっきりと見られるが、本遺跡では遺構は検出されていない。弥生時代中期になって本遺跡内でも集落が形成されるようになり、古墳時代から飛鳥時代にかけては西方の細江川下流域を中心に神社・寺院もつくられ、本遺跡内でも北西部一帯に掘立柱建物群が営まれるようになる。その後の時代については攪乱が遺構面まで及んでいることも大きな要因の一つと考えられ、遺構・遺物ともにあまり見つからなくなり、断片的となっていく。

第2節 既往の調査

本遺跡が発見されたのは1959年にさかのぼる。当時、大阪市立我孫子中学校の教諭であった瀬川芳則氏によって、土取りや住宅建設の工事中に、本遺跡を含む遠里小野・山之内遺跡などの計10地点において遺物が採集された[瀬川芳則1959]。本遺跡範囲内では住吉第7～10地点がこれに当る(図4)。住吉第7地点(長居東4丁目)では石鏃と土鏝などが、住吉第8地点(南住吉2丁目)では石鏃、須恵器甕・甗、土師器杯・飯蛸壺が、住吉第9地点(南住吉1丁目)では須恵器片が、住吉第10地点(南住吉2丁目)では須恵器片が採集されている。これらの発見によって、埋蔵文化財の包蔵地として知られるようになった。

本遺跡での最初の発掘調査は、住吉第8地点内で1980年10月に行われた(80-1次調査)。以来、財団法人大阪市文化財協会が大阪市教育委員会と連携して調査に当り、2000年度までにおよそ650地点で立会調査が行われた。本格的な発掘調査は17地点で実施され、その調査総面積は約6,900㎡である(表1)。市営住宅の建替に伴う調査が面積的には多くを占め、民間住宅の建設に伴う調査の大半は小規模なものである。

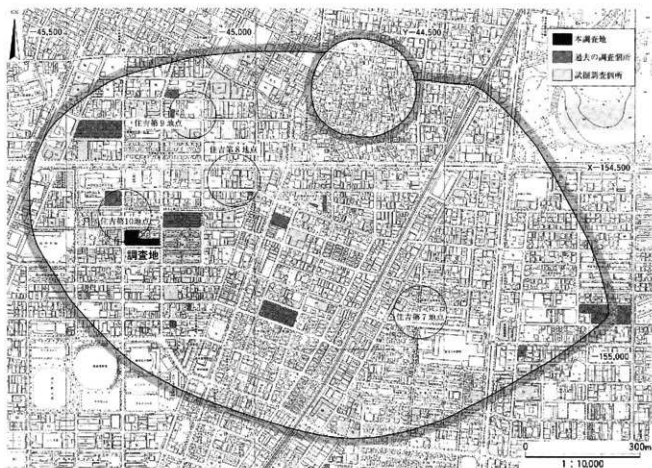


図4 過去の調査地と立会調査の位置 (大阪市地形図(大阪市総合計画局1984)に加筆)

表1 おもな既往の調査一覧

番号	調査回数	調査箇所	面積(㎡)	おもな遺構・遺物	引用・参考文献
1	80-1次	南住吉2丁目7	27	弥生時代～古代の遺物、近世の遺構、細江川の氾濫痕跡? 段丘構成層中の暗色帯	[大阪市教育委員会ほか1982]
2	82-2次	南住吉3丁目7	40	古墳時代後期の土壌・溝、古墳時代～室町時代の遺物	[大阪市教育委員会ほか1984]
3	85-19次	我孫子西1丁目10	650	細江川支流と考えられる溝、近世の主取穴群・道路・塀壁	[大阪市文化財協会1998a]
4	85-37次	南住吉1丁目21	1,900	Ma12層、縄文以前の暗色帯・石版、 飛鳥時代の掘立柱建物・溝・溝・小溝群・土版・落込み、 古代の溝、中世の小溝群、近世の井戸・土取り穴・小溝群	[大阪市文化財協会1998a]
5	86-2次	長居東3丁目13	110	近世の遺構・遺物	[磯山洋1988]
6	86-40次	南住吉1丁目9	280	古代以前の暗色帯・側木板、平安時代後期の火葬墓、 室町時代の耕作溝	[宮崎寛1988]
7	86-48次	長居西3丁目2	680	縄文時代以前の暗色帯・化石林、弥生時代の石版・石版丁、 中世の井戸・溝、近世の道路・井戸・溝	[大阪市文化財協会1998a]
8	87-21次	苅田2丁目9	76	古代の土版・ピット群、中世の溝	[大阪市文化財協会1998a]
9	88-17次	長居東3丁目20	2,175	古代以前の暗色帯、中近世の遺構・遺物	[大阪市文化財協会1998a]
10	89-25次	南住吉3丁目8	103	縄文時代の石版、中世の遺構・遺物(瓦器・管状土版)	[榎井久之1991]
11	90-25次	南住吉2丁目11	6	地山を確認、時期不明の暗色帯	[大阪市文化財協会1998a]
12	90-29次	南住吉2丁目20	22	弥生時代の割片、中世の遺物	[大阪市文化財協会1998a]
13	93-7次	長居西3丁目5	270	弥生時代の堅穴住居・土版・石版・石小刀、近世の井戸	[大阪市文化財協会1998a]
14	94-16次	大福町5丁目12	20	中世の耕作溝	[大庭重信1996]
15	95-1次	南住吉1丁目10	147	中世の火葬墓?・溝、近世の土壌	[大阪市文化財協会1998a]
16	96-20次	長居4丁目3	30	弥生時代前期の遺物、中期の井戸・暗色帯、 古墳時代中期の埴土系土器など、後期の遺構・遺物、 飛鳥時代の遺構、奈良時代の井戸など	[清水和明1997]
17	99-9次	南住吉2丁目15	343	海成層、古代～中世と推測される土壌	本書

本遺跡が重要性を増したのは、1985年に飛鳥時代の掘立柱建物群が発見されてから後である(85-19次調査)。ここでは削剥をまねがれた一區画に掘立柱建物を16棟検出している[大阪市文化財協会1998a]。それらは6世紀の終わりから8世紀初めと推定される建物群であるが、建物群廃絶後も銅製の鉤具が出土した条里方位に合致する溝が存在する。翌年度に行った86-40次調査では平安時代の火葬墓と考えられる遺構が発見されている。

一方、弥生時代の遺物が遊離資料ではあるが蓄積され、付近に遺構が存在する可能性が高まってきた。そして、1993年に初めて弥生時代中期の居住域が確認された(93-7次調査)。1995年にはこの東方でも、中期の井戸が見つかった(95-20次調査)。さらに、ここでは畿内第Ⅰ様式新段階の土器も確認され、弥生時代における活動時期を前期にまでさかのぼらせた点において注目される。また、これよりも古い暗色帯が地山直上や段丘構成層中でも確認されており、長原遺跡や山之内遺跡の層序との対比や、遺構・遺物の確認も課題といえる。

過去20年間にわたって蓄積したデータは、近・現代の攪乱が深くにまで及んでいるため遺跡の保存状態が悪く、市内の他の遺跡に比べるとかなり断片的なものである。ようやく、弥生時代以降の土地利用の様相とその変遷がおぼろげながら予想できるようになった段階である。

第Ⅱ章 MN99-9次調査

第1節 調査の経緯と経過

調査地は南住吉2丁目にあり、南住吉遺跡西寄りに位置する(図4)。大阪市住宅局によって市営南住吉第6住宅の建替え工事が計画されたが、大阪市の埋蔵文化財包蔵地内に位置していたため、建設工事に先立って平成11年3月25日に試掘調査を実施した。その結果、古代と考えられる遺物包含層や遺構が確認され、本調査を実施することになった。

本調査は1999年6月7日に開始した。まず、敷地の西側に住宅の建設予定個所に合わせて南北2個所の調査区を設けた(図5、図版1)。今回の報告では便宜上、北側の調査区を北区(9.7m×5.7m)、南側の調査区を南区(28.8m×10m)と呼ぶことにする。試掘調査結果に従って、まず近・現代盛土を重機によって取り除き、以下については基本的に人力で掘下げ、北区と南区は検出面を揃えるように発掘調査を進めた。遺物包含層(第2a層)およびその下位層(第2b層)の上・下面において精査した結果、北区で土塹を確認した。7月21日に朝日航洋株式会社による基準点測量を実施し、7月23日には実測・写真撮影などの現場発掘調査を終え、7月29日に埋戻しや後かたづけ等のすべての作業を終了した。

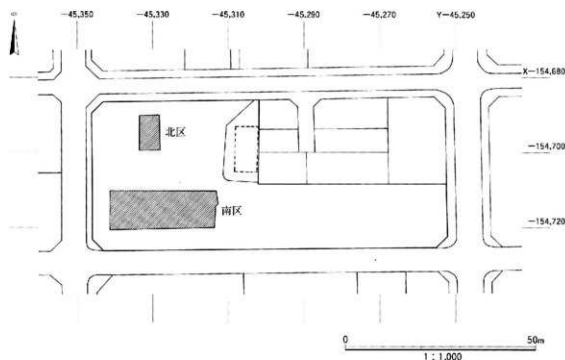


図5 調査区配置図

第2節 層序

部分的な深掘りトレンチ調査を含め、現地表下約5.2m(TP-0.4m)までの地層を観察した(図6～10、図版2・3)。その結果に基づいて本調査地の層序を組み立てた(表2)。以下に各層の層相やその特徴を記す。なお、南住古遺跡の基本層序に関しては、大阪市南部地域の層序対比を行う上で密接な関係をもつことから第三章で詳述する。

第0層：市営住宅の取壊し時に形成された現代盛土層および攪乱層で、南住吉0層に対比される。

第1層：近世から近代までの遺物を包含する作土層で、層厚15cm以下である。南住吉1～2層に対比される。

第2a層：暗黄灰色シルト混り中～細粒砂からなる。古代から中世と考えられるいわゆる遺物包含層である。層厚は20cm以下で、北区および南区西側に部分的に分布する。本層からは土師器・須恵器・瓦器が出土した。南住吉3～5層に対比される。

第2b層：極粗粒砂～中礫を含む暗黄灰色シルト混り中～細粒砂からなる。堆積構造が見られず、生物攪乱を受けているため上位層との層理面は不明瞭であるが、層相は第2a層より下位の第3層に似る。層厚は20cm以下で、北区および南区西側に部分的に分布する。上面で土壌SK201を検出した。

実体顕微鏡による鉱物観察を行った結果、少量ではあるが緑色角閃石と火山ガラス(無色透明の扁

表2 調査地の層序

MN99-9 層序	岩相	色	層厚(cm)	特徴	遺構	おもな遺物	時代	市営古 遺跡層序
第0層	現代盛土	—	60～100	—	—	—	現代	MN0層
第1層	旧耕作土	10YR 4/4	≤15	—	—	陶磁器	近世～近代	MN1～2層
第2層	a 暗黄灰色シルト混り中粒～細粒砂	10YR 5/4	≤20	—	—	土師器・須恵器・瓦器	古代～中世	MN3～5層
	b 含無機砂・中礫暗黄灰色シルト混り中粒～細粒砂	2.5Y 6/6	60	—	土壌 SK201	—	現代～近世	MN6層
第3層	細灰・細粒砂(中礫～中粒砂・砂礫) 最上部：含無機砂・中礫シルト質細粒～粗粒砂	2.5Y 6/4 5Y R2	30～110	トラフ型凹状構造が 発達	—	—	—	MN9層
	a 上部：黄褐色・灰白色 極細粒砂～細粒砂質シルト 下部：灰・黄灰色シルト～粗粒砂	5Y 6/4 5Y 7/2	40～70	上面に乾涸、 底上部：著しく風化	—	—	—	MN12層
第4層	bi 含砂砂礫層(灰・暗緑灰色シルト～粘土と極細砂礫の 互層)	—	105～120	上面に乾涸あり 砂礫層を含む	—	—	—	MN12層
	bii 細灰色 細粒～中粒砂混りシルト	—	35～60	やや暗色化 含砂物産体・炭化木	—	—	後編・中編 旧石器	MN13層
第5層	細灰・黒灰色 細粒～中粒砂混りシルト～粘土	—	10～25	炭化質、暗色砂、 含砂物産体・炭化木	—	—	—	MN14層
第6層	i 細灰・黄灰色 極細粒～極粗粒砂	—	75～85	最上部にロートマ スト、土層・中層は 上方細粒化	—	—	—	MN15層
	ii 灰・青灰色シルト～極粗粒砂	—	25～45	上方細粒化 が空層を成り込む	—	—	—	MN15層
第7層	上部：暗緑灰色シルト～極粗粒砂 中部：灰色 粗粒～中粒砂 下部：灰色 中礫～極粗粒砂(砂礫)	—	40±	海床がよい、炭化物 を多量、雑質	—	—	—	MN15層

凡例 — 上面検出遺物

平型ガラス)が含まれていることを確認した。重鉱物組成や火山ガラスの屈折率測定といった分析は行っていないが、層序関係から緑色角閃石は阪手火山灰層ないし鬼虎川火山灰層、火山ガラスは横大路火山灰層ないし平安神宮火山灰層に起源するものと考えられた。これは本層が沖積層(難波累層)中部層～低位段丘構成層最上部に相当することを示唆していることになるが、本層からの出土遺物はなく、はっきりとした層準を決定することは困難である。このため、本報告では南住吉8層および9層に対応させておく。

第3層：トラフ型斜交層理の発達する砂礫からなる河道および河道からの氾濫堆積層である。主として暗灰色ないし褐灰色中礫～中粒砂からなるが、最上部付近は極粗粒砂～中礫を含むシルト質細～粗粒砂からなる。古流向はN5°～15°Eで、片流れするトラフ型斜交層理の重なりから流れが東から西へシフトしたことが確認された。層厚は30～110cm、調査区全域に分布する。下位層との境界には明瞭な層理面が見られ、南区中央部から東側では下位層を大きく削り込んでいる。南住吉9層に対比される。

第4a層：上部は黄橙色ないし灰白色の極細粒砂～細粒砂質シルトからなり、下部は灰色ないし褐灰色のシルト～粗粒砂からなる。最上部付近は風化を受けて黄灰色に変色しており、上面には乾痕が顕著である。上部には灰色シルトがレンズ状に挟まれ、下部は一部で斜交ラミナが観察される。上部・下部を合わせた層厚は40～70cmである。

これより下位の地層は南区東端で行った深掘りトレンチ調査の、主として断面観察による。

第4bi層：灰色ないし暗緑灰色のシルト～粘土と極細粒砂の互層からなる。上半部のシルト～粘土層は塊状で、上面には乾痕が観察された。下半部の極細粒砂層に植物遺体を含む。層厚は105～120cmである。

第4bii層：暗灰色の細～中粒砂混りシルトからなり、やや暗色化する。中部にレンズ状を呈する細粒砂層を挟み、下底部付近に材などの植物遺体を含む。層厚は35～60cmである。

なお、第4a～bii層は南住吉12層に対比される。

第5層：泥炭質な暗灰色ないし黒灰色の細～中粒砂質シルト～シルトからなる暗色帯構成層である。材などの植物遺体を多く含む。上方細粒化し、最上部の約5cmは上方に漸移して色が薄く淡くなる。層厚は10～35cmである。下位層との境界には明瞭な層理面が見られる。南住吉13層に対比される。

第6i層：緑灰色ないし青灰色の極細～極粗粒砂からなる河成層である。さらに5層に細分可能であるが、それぞれの境界は漸移的である。最上部付近にはロードキャストとみられる変形構造が観察され、上部から中部付近では上方細粒化が見られた。層厚は75～90cmである。

第6ii層：上部が灰色シルト～極粗粒砂、下部が灰色細～極細粒砂からなる河川の氾濫堆積層であ

TP+5.0m

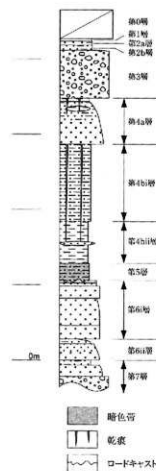
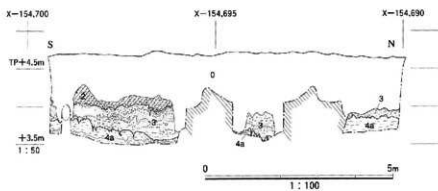
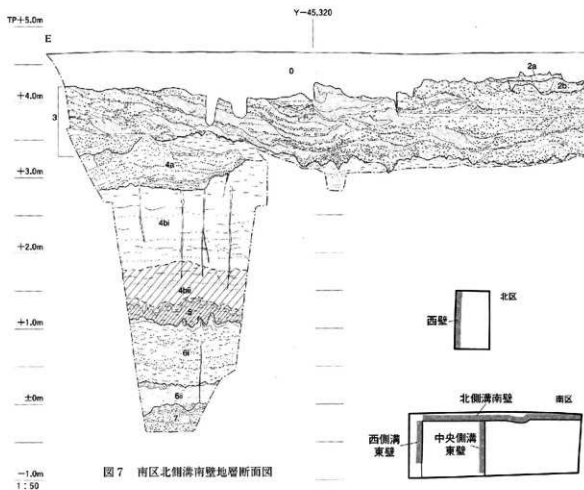


図6 調査地模式柱状図



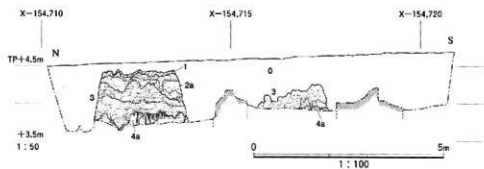
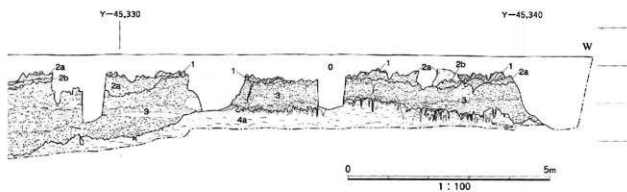


图9 南区西侧沟东壁地层断面图

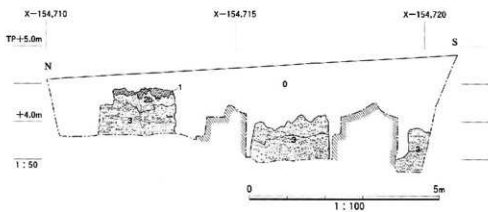


图10 南区中央侧沟东壁地层断面图

る。上部・下部ともに上方細粒化する。下位層との境界には明瞭な層理面が見られ、下位を大きく削り込んでいる。上部・下部を合わせた層厚は25～45cmである。

なお、第6i～ii層は南住吉14層に対比される。

第7層は上部が暗緑灰色シルト～極細粒砂、中部が灰色粗～極粗粒砂、下部が中礫～極粗粒砂で構成される砂礫からなる。上面の標高はTP±0mで、層厚は40cm以上である。中部では平行葉理が観察され、下部には植物遺体の破片が多量に含まれていた。上位層に比べて硬質で淘汰が良く、下部から上部に上方細粒化する。

本調査地の北東約350mの地点の調査ボーリング資料では、Ma12海成粘土層に相当すると考えられる海成砂層の上面はTP±0～+0.35m付近にある。層相・堆積状況と分布高度から、本層はMa12海成粘土層の同時異相の可能性がある。南住吉15層に対比される。

以上、現地表下5.2m(TP+4.8m～-0.4m)までの地層を観察することができた。TP±0mにはMa12海成粘土層に対比される可能性のある砂礫層が観察され、上位に河成の砂礫層を挟んでTP+1.1m～1.4mに材などの植物遺体を含む泥炭質シルト層が見られた。この泥炭層を覆ってシルト層が重なるが、上方へ次第に砂層が挟むようになり、粗粒化して砂礫層へと移り変わる。本調査地が、海→河川、そして河川→湿地へと移り変わり、しばらく安定するが、再び(湿地→)河川へと変化する堆積環境の変遷を推定することができた。本調査地周辺の環境の変遷を考える上でも貴重な資料である。また、南住吉遺跡における基本層序の確立のための基準となるデータであり、他地域との対比を行うことで、さらに広域の環境の変遷を明らかにする重要な資料になると考えられる。

第3節 遺構と遺物

1) 遺構

北区では第2b層上面において土壌SK201を検出した（図11・12）。平面形はほぼ楕円形を呈すると考えられ、長径1.25m以上、短径約0.88m、深さ約0.20mである。底面はほぼ平坦に近いものであった。南側は上方からの土壌汚染のため保存状態が悪く、正確な検出はできなかった。また、遺物は出土しなかった。

南区では第2a層までの層準によって攪乱されており、遺構は検出されなかった。

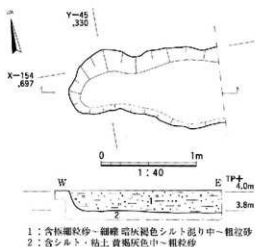


図11 SK201平・断面図

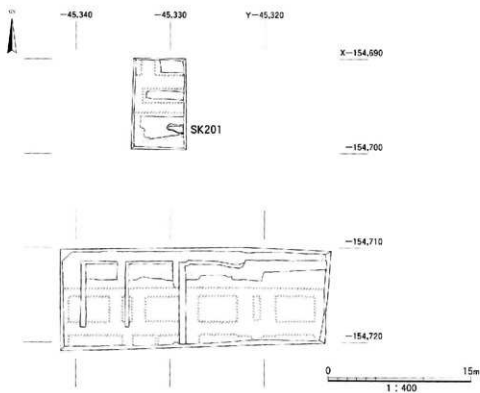


図12 第2b層上面検出遺構平面図

2) 遺物

2・7・9は第1層、1・3・6・8・10・11は第2a層から出土した遺物である（図13、図版1）。以下、第1層から順を追って記述する。

2は土師器の把手で、形状は舌状を呈しており、器面をユビオサエで整えている。鍋あるいは鉢の把手と思われる。色調は橙色で、7～8世紀代に属するものである。7は口縁部が玉縁状に肥厚した

中国の白磁碗Ⅳ類である〔横田賢次郎・森田勉1978〕。器表面には灰白色の釉が施されている。12世紀代に属するものである。9は全体を中空につくる土人形の顔の部分で、裏面はユビオサエである。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良い。18世紀後半代の玩具である。

1は口縁端部をかるくつまみ上げた土師器甕である。口縁部の内外面をヨコナデ調整しており、体部の調整は外面が左上りのハケであるが、内面は剥落しており不明である。7～8世紀代に属するものである。3は須恵器杯壺の細片で、口径18.4cmに復元された。8～9世紀に属するものであろう。4は口径15.2cm、器高3.9cmに復元された須恵器杯Bである〔奈良国立文化財研究所1976〕。口縁端部を丸くおさめており、高台はやや内傾している。8世紀代に属するものである。5は須恵器壺の底部片で、裏面には高台のはがれた跡がある。底部外面の縁辺をヘラケズリ調整する。8世紀代に属するものである。6は体部の下半以下を欠損した須恵器鉢である。口縁端部に強いヨコナデを加えており、外側につまみ出されている。体部の中程には幅広い凹線状のナデが施されている。6～7世紀に属するものである。8は口縁端部および体部の上半以下を欠損した東播系須恵器鉢の細片である。14世紀に属するものである。10は土師質の風炉と考えた。砂粒が多く混入している。外面の口縁部上端には突帯の剥離痕があり、その下位には櫛による文様がある。内面には縦に粘土を貼付けている。口縁端部はヘラで斜めに切落している。時期は不明である。11は直径3.9cm、中央の孔の直径1.2cmを測る円筒形の上錘の破片である。胎土中に赤色粒を多く含む。7～8世紀に属するものと思われる。

以上から、第1層の形成年代は近世～近代、第2a層は14世紀以降で中世ごろと考えられるが、6～8世紀に属する遺物も多い。

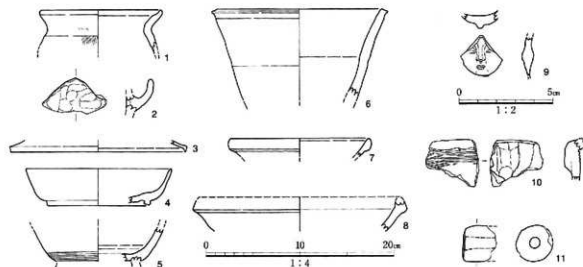


図13 出土遺物

第Ⅲ章 調査成果の検討

第1節 南住吉遺跡の基本層序

南住吉遺跡の基本層序が最初にまとめられたのは、『南住吉遺跡発掘調査報告』においてである[大阪市文化財協会1998a]。包含される遺物の年代観に基づいて区分され、基本層序が組み立てられた。このためいわゆる地山層については一括して扱われてきたが、地山層中には根を張った木株の化石やナウマンゾウの足跡化石と見られる凹み、暗色帯といったヒトの活動可能な環境が見つかったため、地山層の細分の必要性が指摘されていた。ここでは、[大阪市文化財協会1998a]に掲載された調査地とこれまでの試掘調査を含めた調査成果に地層の層相や特徴などの記載を加え、いわゆる地山層を中心に基本層序を再度検討する。

基本層序をまとめるに当たって、遺物を包含する南住吉0～8層については[大阪市文化財協会1998a]

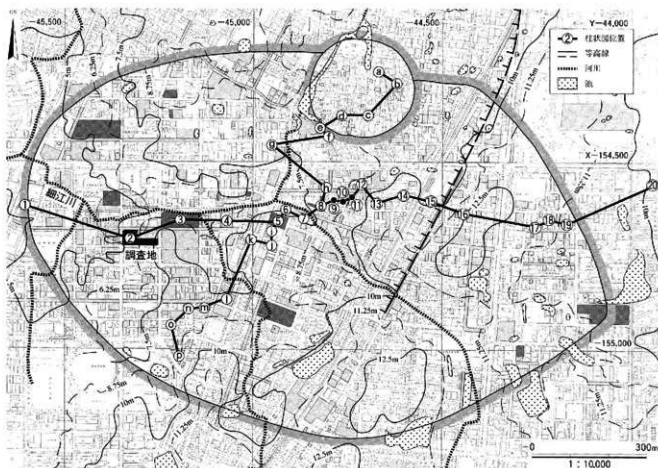
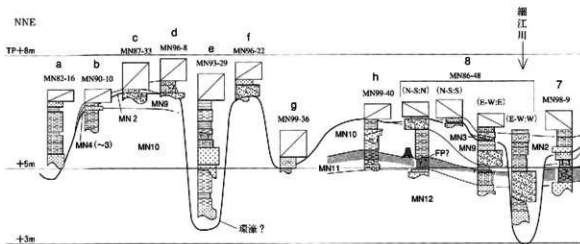


図14 遺跡周辺の旧地形と柱状図の位置

大阪市地形図(大阪市総合計画局1984)に加筆(等高線および河川は1万分の1地形図(陸地測量部1920年測図)を基に作図)



南北柱状対比図

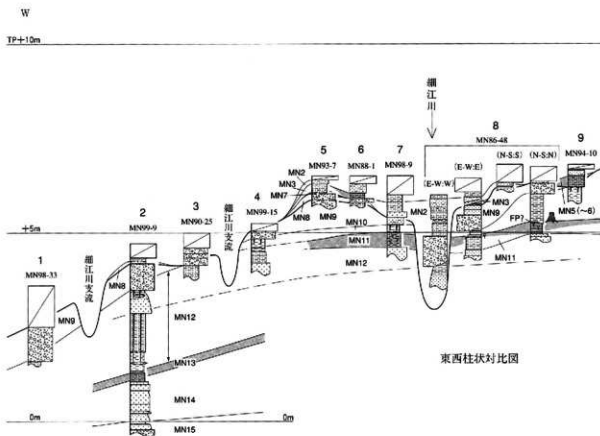


図15 南住吉遺跡の柱状対比図

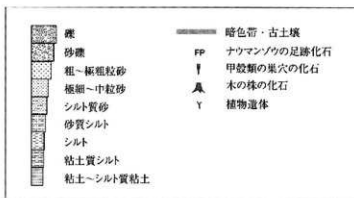
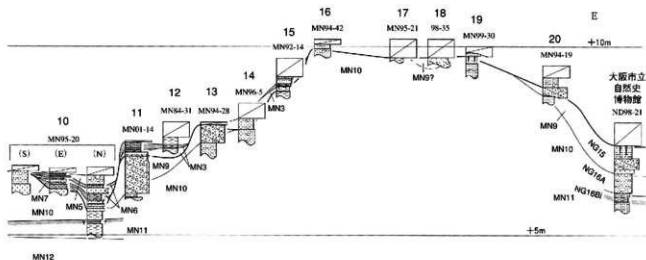
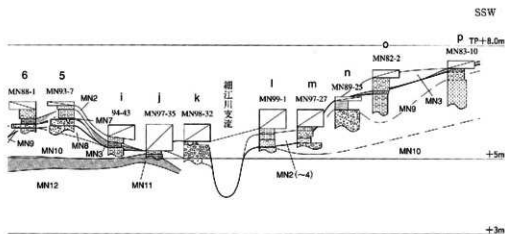


表3 南住古遺跡の基本層序

南住古基本層序		岩相	層厚(cm)	自然現象 ほか	遺構	おもな遺物	時代
沖積層 (堆積層)	上組層	MN0層	現代土および攪乱層	—	—	—	現代
		MN1層	含細礫・暗褐色～黒灰色シルト～シルト質砂	10～15	—	—	近・現代
		MN2層	含細礫・黄褐色～黄褐色粘土質シルト～砂質シルト	10～30	—	—	近世
		MN3層	含礫・砂・町堀～灰褐色シルト～粘土質シルト	10～35	—	—	鎌倉・室町時代
		MN4層	町堀～灰褐色シルト～粘土質シルト	10～20	—	—	平安時代
		MN5層	町堀～黄褐色砂質シルト～シルト質砂	5～30	—	—	鎌倉・奈良時代
		MN6層	含細礫・黒褐色砂質シルト～シルト質砂	5～40	—	—	古墳時代後期
		MN7層	含粗粒砂～細礫・黒褐色シルト～シルト質砂	5～30	—	—	室生時代中期
	低位段丘 構成層	MN8層	黄褐色シルト・泥り中粒～細粒砂	(不明)	—	—	縄文時代
		MN9層	上部：灰～灰黄色 粘土質シルト～細粒砂 下部：灰黄～明灰黄色 砂礫	30～100	—	—	縄文時代
中・低段丘 構成層	中・低段丘 構成層	MN10層	黄白・灰白色シルト～砂質シルト	10～30	—	—	後期・中期 旧石器
		MN11層	暗灰色・黒灰色砂質シルト～粘土(硬質シルト)(有礫質、灰黄質)	5～40	—	—	後期・中期 旧石器
		MN12層	上部：黄褐色～灰白～暗灰色シルト～砂礫 下部：灰～暗褐色～暗灰色シルト～粘土～細粒砂	40～220	—	—	後期・中期 旧石器
		MN13層	灰黄質 暗灰・黒灰色 細粒砂～砂質シルト～粘土(泥灰質)	10～35	—	—	後期・中期 旧石器
		MN14層	緑灰～青灰色シルト～砂礫	30～110	—	—	後期・中期 旧石器
		MN15層	暗緑灰・灰色・青灰色シルト～砂礫(薄皮層(Ma12))	ab.500	—	—	後期・中期 旧石器

凡例：上図表出遺構 下図表出遺構

における層序区分を踏襲し、いわゆる地山層を南住吉9～15層に新たに区分する(表3)。遺跡周辺の旧地形および各調査地における柱状図の位置を図14に、柱状対比を図15に示す。なお、図15に示した大阪市立自然史博物館(ND98-21次)は、㊟地点(図14)から東北東約400mに位置している。

南住吉0層：現代盛土層および攪乱層である。

南住吉1層：細礫を含む暗褐色ないし黒灰色シルト～シルト質砂からなる近・現代の作土層である。層厚は10～15cm程度であることが多い。

南住吉2層：細礫を含む黄灰色ないし黄褐色粘土質シルト～砂質シルトからなる近世の遺物包含層ないし作土層である(d・i・5～8地点)。層厚は約10～30cmである。上面では多数の井戸や土取り穴群が検出されているほか、細江川の主流および支流の旧河道と考えられる溝が見つかった。近世の陶磁器が包含される。

南住吉3層：礫・砂を含む暗褐色ないし灰黄褐色粘土質シルト～砂質シルトからなる平安時代後期から室町時代の遺物包含層で、作土層ないし古土壌として見られる(o・5・8・11・12・15地点)。さらに上部・下部に細分される場合がある。層厚は約10～35cmである。上面に火葬墓と考えられる土壇や井戸・溝・ビットのほか、下面に黎溝群が検出されている。瓦器・瓦質土器のほか、11世紀後半～12世紀前半に属する白磁碗や14～15世紀に属する青磁が包含される。

南住吉4層：暗黄褐色ないし灰褐色シルト～粘土質シルトからなる。層厚は約10～20cmである(b地点)。上面では土壇やビット群が検出されている。瓦器出現以前の平安時代の遺物包含層であるが、局所的な分布を示すことから詳細は不明である。

南住吉5層：暗黄褐色ないし灰色砂質シルト～シルト質砂からなる(5・10地点)。層厚は約5～30cmである。掘立柱建物群や構、多数の柱穴と溝などが検出されている。飛鳥～奈良時代の遺物包含層で古土壤として見られた。

南住吉6層：粗粒砂～細礫を含む黒褐色砂質シルトないしシルト質砂～砂からなる(10地点)。層厚は約5～40cmである。弥生時代後期～古墳時代の遺物包含層で、古土壤を含む暗色帯構成層を形成している。

南住吉7層：粗粒砂～細礫を含む黒褐色シルト～シルト質砂からなる(5・10地点)。畿内第Ⅲ様式を中心とした弥生土器が出土する弥生時代中期の遺物包含層である。層厚は約5～30cmである。上面で堅穴住居や柱穴・土壇が検出されており、弥生土器のほか凸基無茎式石甕が出土している。

南住吉8層：いわゆる地山層の直上に堆積する時期未詳の暗色帯を一括する(2・5地点)。後述する南住吉9層上面で縄文時代早期～中期に多く見られる凹基無茎式石甕が出土していることから、沖積層上部層Ⅱから中部層に相当する可能性を指摘している[大阪市文化財協会1998a]。

南住吉9層：上部は灰色ないし灰黄色の粘土質シルト～細粒砂、下部は灰黄色ないし明黄灰色の砂礫からなる河成層で、上方細粒化する。多くの地点では上部層は削剥され、下部層が主として観察される。遺跡西部(2地点)ではトラフ型斜交層理の発達する河道が確認されている。最上部付近は著しく風化を受けて粘土化が進む。下限は明瞭で、下位を削り込んで堆積する。上部・下部を合わせた層厚は最大100cmである。遺跡中央部を模式地とし、全域に広く分布する。ND98-21次調査[大阪市文化財協会2001b]との連続から本層は低位段丘構成層に当り、本層より下位は中位段丘構成層に相当する。

南住吉10層：黄白色ないし灰白色シルト～砂質シルトからなる河成層である。上面に乾痕が観察され、上部は風化が著しく粘土化が進むが、下半部には斜交ラミナが観察されることがある。層厚は約10～70cmである。遺跡中央部を模式地とし、広く分布する。

南住吉11層：暗灰色ないし黒灰色の砂質シルト～粘土、一部で礫質シルトからなる古土壤を含む暗色帯構成層である(6～10・20地点)。材化石や植物遺体を多く含み有機質で泥炭質である。遺跡中央部では根を張った木の株の化石やナウマンゾウと思われる足跡化石状の凹みを検出している(8地点)。層厚は5～40cmで、遺跡中央部を模式地とし、模式地付近ではTP+5m付近によく分布する。

南住吉12層：主として黄橙色ないし黄灰色シルト～細粒砂からなる河成層である。上面に乾痕が観察される場合がある。層厚は確認した遺跡西部において40～220cmで、層厚の厚いところでは2層準に細分できる。上部は黄橙色・灰白色ないし褐灰色のシルト～砂礫からなり、下方へ粗粒化する。層厚は約40～70cmである。最上部付近は風化を受けて黄灰色に変色しており、下部は灰色・暗緑灰色ないし暗灰色のシルト・粘土～極細粒砂からなる。下部上面に乾痕が観察され、下底部付近に植物遺体や材化石を含む。層厚は模式地である遺跡中央部で20～65cm以上、遺跡西部では170cm(2地点)である。遺跡中央部を中心に全域に広く分布する。

南住吉13層：泥炭質な暗褐色砂質シルト～粘土からなる暗色帯構成層である(2地点)。植物遺体や材化石を多く含む。遺跡西部を模式地とし、層厚は10～35cmである。下位層との層理面は明瞭であ

る。7・10地点の南住吉11層と似た層相を示すが、南住吉11層が細江川流域からND98-21次調査にかけてTP+5m付近に比較的平面的に分布し、分布高度差が3～4 mあることから区別した。

南住吉14層：緑灰色ないし青灰色のシルト～砂礫からなる河成層である。上方細粒化が見られる。下位層を削り込んで堆積する(2地点)。遺跡西部を模式地とし、層厚は30～110cmである。

南住吉15層：暗緑灰色・灰色ないし青灰色シルト～砂礫からなる海成層である。遺跡西端部ではサンドパイプが顕著に見られ、Ma12海成粘土層と同時異相の関係にあると考えられる。遺跡北西端における上面はTP+3.2m付近にある。遺跡中西部の4地点から北へ170m地点でのボーリング資料ではTP±0～+0.35m付近にある。また、遺跡東端の長居公園地下駐車場建設現場において、TP+3m付近にあり、大阪市立自然史博物館の情報センター地下ではTP+2.2m付近にあることが確認されている[石井陽子・中条武司2000]。遺跡北西部を模式地とし、層厚は長居公園地下駐車場で約5 mである。

第2節 周辺遺跡との層序対比

南住吉遺跡の南方の山之内遺跡では、層相およびその特徴と暗色帯・火山灰層・海成粘土層を鍵層として高位高位段丘構成層から沖積層までの詳しい層序区分がなされており、東方で詳細な層序が確立している長原遺跡の標準層序と対比されている。本遺跡では火山灰層が確認されていないため、層相およびその特徴と暗色帯・海成粘土層を鍵層として南住吉遺跡と山之内遺跡および長原遺跡との層序対比を南住吉9層より下位について行い、南住吉8層より上位については遺物の年代による対比を記しておく。なお、図17に南住吉遺跡から山之内遺跡・瓜破遺跡を経て長原遺跡までの柱状対比図を示す。

山之内遺跡における沖積層の層準と年代および長原標準層序との対比は以下の通りである。第1層は近世で長原2層に、第2～3層は中世でそれぞれ長原3層と4層に対応する。第4層は縄文早期～弥生時代で一括して長原8～12D層に、第5層は沖積層最下部に当る最終氷期の晩水期、約1.7～1万年前に形成された地層と考えられていることから長原13A層に対比されている。なお、古代から弥生時代の長原遺跡における層準と年代を大きく捉えたと、長原4A～4Bii層が鎌倉～室町時代、長原

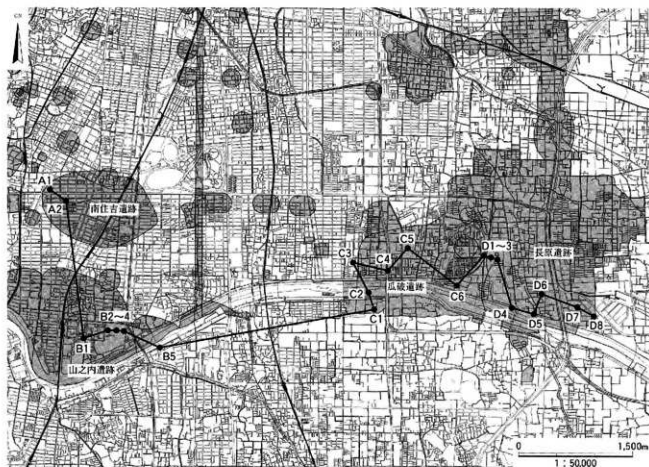
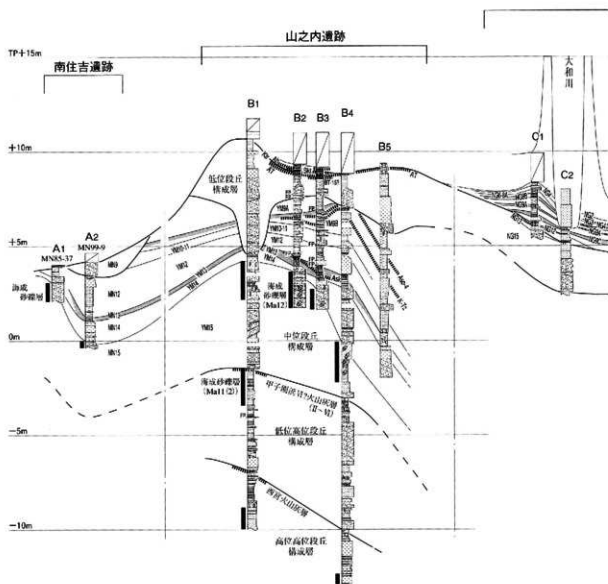


図16 柱状図の位置 《『大阪市文化財地図』(平成13年度版)を使用》



4Bii～4C層が平安時代、長原5A～7Aii層が飛鳥・奈良時代、長原7Aii～7Biii層が古墳時代、長原7Bii～8A層が弥生時代後期、長原8B～8Cii層が弥生時代中期、長原9A～12D層は弥生時代前期から縄文時代早期～草創期である。

南住吉遺跡における南住吉2～8層の年代は、南住吉2層が近世、南住吉3層が平安時代後期～室町時代、南住吉4層が瓦器出現以前の平安時代、南住吉5層が飛鳥・奈良時代、南住吉6層が弥生時代後期から古墳時代、南住吉7層が弥生時代中期を中心とする時代、南住吉8層が縄文早期～弥生時代ごろである。

したがって、南住吉2層は山之内第1層・長原2層に、南住吉3層は山之内第2～3層・長原3～

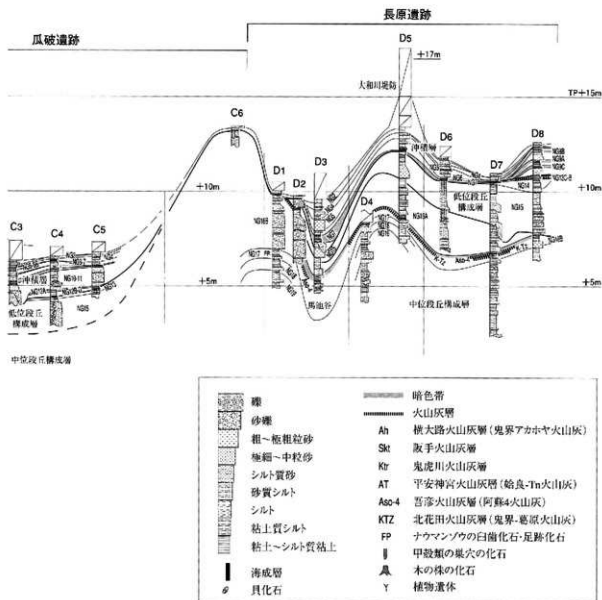


図17 大阪市南部地域の柱状対比図 ([小倉徹也・趙哲済2001]に加筆)
(南住吉遺跡～山之内遺跡～瓜破遺跡～長原遺跡)

4Biii層に、南住吉4層は長原4C層に、南住吉5層は長原5A～7Aii層に、南住吉6層は長原7Aii～8A層に、南住吉7層は長原8B～8Cii層に、南住吉8層は長原9A～12D層にそれぞれ対比される。また、山之内第4層は南住吉7・8層に、山之内第5層は南住吉8層の一部にそれぞれ相当する。

山之内遺跡における低位・中位段丘構成層の層準および長原標準層序との対比は以下の通りである。山之内第6層は鬼虎川火山灰層と平安神宮火山灰層(始良-Tn火山灰: AT)を挟む低位段丘構成層上部に相当し、長原13Bi～ii層に対比されている。山之内第7層は低位段丘構成層上部に相当し、層序関係から長原13C～14層に対応する。山之内第8層は低位段丘構成層下部に相当し、長原15層に対比される。山之内第9A・9B層は中位段丘構成層に相当し、第9B層中に吾彦火山灰層(阿蘇4火

山灰：Aso-4)と北花田火山灰層(鬼界-葛原火山灰：K-Tz)の降灰層準が認められることからそれぞれ長原16A・16B層に対比される。なお、長原16B層の上部は暗色帯構成層で、ナウマンゾウやオオツノジカの足跡化石、根を張った木の株の化石が多数検出されている。山之内第10・11・12層はそれぞれ長原17・18・19層に対比されている。山之内第13層は泥炭～泥炭質粘土層で上部に根を張った木の株の化石が、基底面で足跡化石状の凹みが検出されており、浅香火山灰層を挟んでいる。山之内第14層は緑灰色の砂礫層で、山之内第15層は海成砂礫層でMa12海成粘土層に対比されている。山之内第16層は砂礫層である。山之内第17層以下は高位段丘構成層である。なお、山之内第14層以下については長原標準層序では未命名層であり、山之内遺跡と長原遺跡の層序対比は行われていない。

以上より、南住吉第9～15層の対比は以下のとおりである。南住吉第9層下部は層相および大阪市立自然史博物館(ND98-21次)地点からの連続で山之内第8層・長原15層に対比される。従って南住吉第9層上部は山之内第6・7層に対比され、長原13B～14層に対応する。南住吉11層および南住吉13層は暗色帯構成層で、泥炭質な層相を示す。南住吉11層ではナウマンゾウの足跡化石と思われる凹みや木株の化石が見つかった。ND98-21次調査との連続と層序関係から南住吉11層を山之内第9B層・長原16B層に、南住吉13層を山之内第13層に対比させておくが、今後、火山灰層による確認が必要である。南住吉9層下部と南住吉11層に挟まれる南住吉10層は山之内第9A層・長原16A層に、南住吉11層と南住吉13層に挟まれる南住吉12層は山之内第10～12層・長原17～19層にそれぞれ対比される。南住吉15層はMa12海成粘土層に対比されと考えられていることから山之内第15層に対比され、南住吉13層と15層に挟まれる南住吉14層は山之内第14層に対比される。

南住吉遺跡と山之内遺跡および長原遺跡との対応関係は以上であるが、これらからもわかるように上町台地上に立地する南住吉遺跡と山之内遺跡には低位段丘構成層が分布している。上町台地はこれまで中位段丘と考えられてきたが、台地を西部と東部に区分して、西部を中位段丘面、東部を低位段丘面とする考えがある[宮地良典ほか1998]。南住吉遺跡と山之内遺跡は[宮地良典ほか1998]でいう東部に含まれ、本章の結果とも調和的である。このことから上町台地の相対的な隆起過程で東(東～南東)部が低位段丘構成層を堆積する環境にあった時期に、西(北西～西)部はすでに先行して相対的に隆起していたことが推測される。これは第1章で述べた上町台地の地形的特徴にも一致し、上町台地の西(北西～西)部と東(東～南東)部では形成時期に差があることを示唆しているものと考えられる。今後、台地の形成を再検討する必要がある。

第3節 まとめ

本調査地で検出された遺構・出土遺物は少なかったが、出土遺物から以下のことがうかがえる。

古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器や須恵器が出土していることから、当該期の集落が近辺に存在していた可能性が示唆される。同時期の遺構が検出された85-37次調査地では古墳時代後期から飛鳥時代にわたって営まれた16棟の掘立柱建物を検出しており[大阪市文化財協会1998a]、建物廃絶後も銅製の鉸具が出土した条里方位に合致する溝が存在するなど、長期間にわたって人々の活動拠点となっていた所である。今回の調査地はそれより南東約300mの位置にあるが、削刺される以前には古墳時代後期から奈良・飛鳥時代の遺跡が広がっていたとも考えられる。また、平安時代末に多く出土する中国の白磁碗Ⅳ類や中世前期にも輸入磁器を所持する階層が近くに居住していたことがうかがわれる。白磁碗Ⅳ類が出土した調査地として85-37次や95-1次調査があるが、いずれも今回の調査地点より北西方向に位置しており、平安時代末には南住吉遺跡の北西部一帯に活動拠点が展開していたようである。同時期の遺構で特筆すべきものに95-1次調査で出土した常滑焼の甕を使用した火葬墓がある。畿内での出土例は少なく、当該期の南住吉遺跡を考える重要な資料である。

室町時代になっても今回の調査地のほかに86-48次や95-1次調査で中国製の青磁や東播系須恵器鉢や瓦器が出土しており、前代より活動拠点の範囲がやや広がっている傾向が見てとれる。本遺跡の西方には室町時代(南北朝期)の遺跡として住吉行宮跡があり、さらに西には住吉大社旧境内遺跡が存在する。今回の調査地付近にもそうした古代から中世の遺跡と関連する集落などが展開していたことが推測できる。

本調査地およびこれまでの調査資料を基に地層を詳しく検討して基本層序を組み立て、山之内および長原遺跡と対比した。基本層序では主として低位段丘構成層から中位段丘構成層について行った。その結果、これまで時期未詳であった根を張った木の株の化石およびナウマンゾウの足跡化石と思われる凹みを検出した南住吉11層は、山之内第9B層および長原16B層に対比されることがわかった。また、南住吉15層はMa12海成粘土層に対比されることがわかった。後期～中期旧石器時代の古地理復原にとって貴重な基礎資料を得ることができた。また、[大阪市文化財協会1998b]でも示唆されているように、上町台地上には広く低位段丘構成層が分布している。上町台地は中位段丘とされているが本報告の結果からも東(東～南東)部は低位段丘と考えられ、上町台地の形成と合わせて再検討する必要がある。なお、本報告における基本層序は主として層相とその特徴および暗色帯を鍵層として区分している。さらに確かなものにするため火山灰層による対比を行う必要があり、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 石井陽子・中条武司2000、「長居地下での地層の全体像－自然史博物館地下の地質4－」：大阪市立自然史博物館編『Nature Study』46巻5号
- 石神佑1983、「住吉大社境内採集石器について」：『大阪の歴史』第10号 大阪市史編纂所、pp.58－61
- 市原実2001、「続・大阪層群－古瀬戸内湖水系－」：『アーバンクボタ』第39号 株式会社クボタ、pp.2－33
- 植木久1988、「松本邸建替工事に伴う莊嚴浄土寺境内遺跡発掘調査(SG86－2)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.69－72
- 上田宏範1988、「住吉古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修 大阪市史』第1巻、pp.374－384
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982、「南住吉遺跡発掘調査略報(MN80－1)」：『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.60－68
- 1984、「南住吉遺跡(MN82－2)発掘調査略報」：『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.76－80
- 1985、「沢村邸建設に伴う住吉旧境内遺跡発掘調査(SM83－2)略報」：『昭和58年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.45－52
- 1988、「松田邸建築工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM86－60)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.85－87
- 1994、「北村邸建設工事に伴う山之内遺跡発掘調査(YM93－33)略報」：『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.87－95
- 大阪市文化財協会1992、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ
- 1995、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ
- 1997、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ
- 1998a、「南住吉遺跡発掘調査報告』
- 1998b、「山之内遺跡発掘調査報告』
- 1999、「山之内遺跡発掘調査報告』Ⅱ
- 2000、「長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ
- 2001a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ
- 2001b、「大阪市文化財協会発掘調査報告－1998年度－」、pp.6－7
- 大庭重信1996、「小山邸建築に伴う発掘調査(MN94－16)」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.119－123
- 小倉徹也・越智清2001、「現大和川流域の低位・中位段丘構成層－大阪市南部の遺跡のデータを中心として－」：『地学団体研究会第55回総会(山形)講演要旨集』 地学団体研究会、p.253
- 小倉博之・吉川周作・此松昌彦・本谷幹一・三田村宗樹・石井久夫1992、「大阪府、上町台地南部の台地構成層と地形面の形成時期」：『第四紀研究』第31巻第3号、pp.179－185
- 京嶋愛1988、「山本氏による共同住宅建設工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86－40)略報」：『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.77－83
- 久保和上1996、「堀井邸建築に伴う発掘調査(SM94－4)」：『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.127-137

建設省国土地理院1965、『土地条件調査報告書(大阪平野)』

1983、『土地条件調査報告書(大阪平野)』

櫻井久之1991、『鉄骨造4階建住宅建設に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN89-25)略報』:『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.149-157

佐藤隆1992、『平安時代における長原遺跡の動向』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114

2000、『古く難波地域の土器様相とその史的背景』:大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-268

清水和明1997、『細井氏による建設工事に伴う発掘調査(MN95-20)略報』:『平成7年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.169-177

鈴木秀典1982、『瓦器編の編年』:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-282

瀬川芳則1959、『住吉区の土代遺跡』:『社会科と教育』研究紀要第1集 大阪市立中学校教育研究会社会部、pp.1-8

横山洋1986、『南住吉遺跡で発見された7世紀の建物群について』:大阪市文化財協会編『葦花』2号

1988、『田中邸建替工事に伴う南住吉遺跡発掘調査(MN86-2)略報』:『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.74-76

高橋工1989、『生田邸建設工事に伴う津守庵寺遺跡発掘調査(TM87-3)』:『昭和62年度大阪市埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・大阪市文化財協会、pp.173-187

田辺昭三1966、『陶器古窯址群』平安学園考古学クラブ

1981、『須恵器大成』角川書店

趙哲清1983、『瓜破・瓜破北遺跡の層序』:大阪市文化財協会編『瓜破遺跡』、pp.17-20

1995a、『長原遺跡の標準層序』:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.19-34

1995b、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』:同上、pp.41-44

2000、『瓜破台地東北部の段丘について』:『研究紀要』第4号 大阪市文化財協会、pp.7-16

奈良国立文化財研究所1974、『平城宮発掘調査報告書』Ⅵ、奈良国立文化財研究所学報第23冊

1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ、奈良国立文化財研究所学報第26冊

1978、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ、奈良国立文化財研究所学報第31冊、pp.92-100

藤岡謙二郎1942、『大阪市住吉区遠里小野町弥生式遺跡』:『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第12輯 大阪府、pp.67-80

藤田和夫・笠間保夫1982、『大阪西南部地域の地質』:『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』地質調査所

藤森栄一1967、『かもしかみち以後』学生社

古市見・杉本厚典1997、『照ヶ丘矢田遺跡でみつかった弥生時代の大壺型』:大阪市文化財協会編『葦花』71号

堀田啓一1979a、『住吉周辺の考古学散歩(一)』:『すみのえ』通巻152 住吉大社社務所、pp.27-35

1979b、『住吉周辺の考古学散歩(二)』:『すみのえ』通巻153 住吉大社社務所、pp.19-29

前田長三郎1930、『遠里小野石器時代遺跡に就いて』:『考古学雑誌』第20巻9号、p.52

前田豊邦1983、『住吉大社と周辺の古墳』:『すみのえ』通巻171 住吉大社社務所、pp.51-59

宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・栗川旭1998、『大阪東南部地域の地質』:『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』

地質調査所

横田賢次郎・森田勉1978、『太宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—』:九州歴史資料館編『研究論集』4、pp.1-26

あ　と　が　き

本書は南住吉遺跡の発掘調査報告書の第2冊である。1998年に第1冊を刊行して以降、4年経過する中で本格的な発掘調査にいたったのは本書に掲載した1件のみであった。本調査地において検出した遺構ならびに遺物はともに少なかったが、先の報告書に盛り込まれた成果を再度検討し、古代から中世の当遺跡の概要を整理する機会となった。

また、本書ではこれまで行われた調査に試掘調査を加えて、地質学的な検討を行った。その結果、南住吉遺跡の基本的な地層の重なりと大阪市南部地域の地層の対応関係を多少なりともまとめることができた。しかし、これで十分な検討が行えたというわけではない。今後はさらに調査資料を蓄積し、検討を加えなければならない点は少なくない。大方の忌憚ない御批判をお願いする次第である。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- M Ma12(海成粘土層) …… 6, 12, 18, 20, 24, 25
- あ 暗色帯(構成層) …… 6, 9, 15, 17~19, 21, 23,
…………… 25
- い 井戸 …… 6, 18
- お オオツノジカ …… 1, 23
- か 瓦器 …… 6, 8, 18, 22
火山ガラス …… 8, 9
瓦質土器 …… 18
化石林 …… 6
火葬墓 …… 6, 18, 25
- き 畿内第Ⅲ様式 …… 18, 19
木(の)株の化石 …… 15, 17, 19, 23~25
- し 澄賀Ⅲa式土器 …… 2
縄文海進 …… 1
- せ 石甕 …… 2, 5, 6
- た 堅穴住居 …… 3, 6, 18
- ち 中位段丘(構成層) …… 18, 19, 23~25
沖積層 …… 9, 18, 19, 21, 25
- て 低位段丘(構成層) …… 9, 18, 19, 23~25
- と 東播系須恵器 …… 14, 25
土鍾 …… 2, 5, 6, 14
常滑焼 …… 25
土取り穴(群) …… 6, 18
- な ナイフ形石器 …… 1, 2
ナウマンゾウ …… 1, 15, 17, 19, 23~25
- は 白磁 …… 14, 18, 25
- へ 平安神宮火山灰層 …… 1, 9, 23
- ほ 方形周溝墓 …… 2
掘立柱建物 …… 3, 4, 6, 18, 19, 25

〈地名・遺跡名など〉

- う 上町台地 …… 1~4, 24, 25
上町新層(帯) …… 1
瓜破遺跡 …… 3, 21, 23
- お 遠里小野遺跡 …… 2~5
- か 河内平野 …… 1
- し 莊厳淨土寺境内遺跡 …… 3, 4
- す 住吉大社旧境内遺跡 …… 1, 3, 4, 25
- つ 津守庵寺 …… 4
- て 帝塚山古墳 …… 3
寺岡磐跡 …… 1
照ヶ丘矢田遺跡 …… 2
- な 長原遺跡 …… 6, 21, 23, 25
- に 西大阪平野 …… 1
- は 波食磯 …… 1
- ふ 佛念寺山断層 …… 1
- ほ 瀬江川 …… 1, 4, 6, 18, 20
- や 欠田部遺跡 …… 2
大和川 …… 1
山之内遺跡 …… 1~6, 21, 23, 25

**Archaeological Report
of the
Minami-Sumiyoshi Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Municipal Apartmenthouse complex

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbol is used to represent archaeological features, in this text

SK : Pit

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Site location and current investigation of the site.....	1
S.1 Site location and outline of geography	1
S.2 Current investigation of the site	5

Chapter II MN99-9	7
S.1 Background and progress of research.....	7
S.2 Stratigraphy	8
S.3 Features and artifacts	13
1) Features	13
2) Artifacts	13

Chapter III Geological discussion on the Minami-Sumiyoshi Site	15
S.1 Typical stratigraphy of the Minami-Sumiyoshi site	15
S.2 Correlation of the stratigraphy with surrounding sites	21
S.3 Conclusion	25

Bibliography and References	27
-----------------------------------	----

Postscript

Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

This volume reports on the results of excavations undertaken at the Minami-Sumiyoshi site between June and July 1999. These excavations were undertaken prior to the development of a municipal apartment complex.

The Minami-Sumiyoshi site is located on the top of the Uemachi Terrace in Sumiyoshi ward, Osaka City. Past excavation in this area has revealed features extending from the Jomon Period to the Edo Period at this multi-component site.

This excavation has revealed that modern developments have caused considerable damage to archaeological deposits of the site and only one pit believed to be from between the Asuka and Muromachi periods were discovered along with a small number of artifacts.

In addition to the traditional archaeological investigation of the site, we also closely examined the natural stratigraphy of this site and its environs. Results of this study are as follows. First, we were able to establish the typical stratigraphy of the Minami-Sumiyoshi site which is characterized by three major formations: an alluvial deposit, the Lower Terrace Formation, and the Middle Terrace Formation. Additionally several tree stumps and fossilized Naumann's Elephant footprints believed to be around 90,000 years old were discovered. A further result of this study was a correlation of the stratigraphy of this site with that of both the Yamanouchi and Nagahara sites. One important result of that has been the ability to link co-occurring strata between sites and thereby more accurately date strata at the Minami-Sumiyoshi Site. Finally, we were able to clarify the distribution of the Lower Terrace and Middle Terrace Formations on the Uemachi Terrace.

Further Reading

Osaka City Cultural Properties Association

- 1998 *Archaeological Reports of the Minami-Sumiyoshi site*, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

- 1998-1999 *Archaeological Reports of the Yamanouchi site* Vols. I-II, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

- 1978-1999 *Archaeological Reports of the Nagahara sites* Vols. I-VII, Osaka. (In Japanese, with English summary)

Osaka City Cultural Properties Association

- 1978-2001 *Archaeological Reports of the Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XVII, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみすみよしせきはつくつちょうさほうこく2							
書名	南住吉遺跡発掘調査報告Ⅱ							
編著者名	小倉徹也・田中清美・松尾信裕							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法門坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみすみよしせきは 南住吉遺跡	みなみすみよしせきは 大阪市住吉区 南住吉2丁目	西町村	道路番号	34° 36′ 16″	135° 30′ 40″	19990607～19990729	343㎡	市営住宅建設 工事に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主 な 遺 物		
南住吉遺跡	集落	古代～中世		土壁		土師器・須恵器・瓦器		

図 版



調査地遠景(東から)



第2a層出土遺物



北区西壁地層断面
(東から)



南区北側溝南壁
地層断面(北東から)



南区西側溝東壁
地層断面(北西から)

南区深掘り北壁
地層断面(南から)



北区第2b層上面
検出状況(南から)



南区第2b層上面検出状況
(西から)



大阪市住吉区 南住吉遺跡発掘調査報告Ⅱ

ISBN 4 - 900687 - 57 - X

2002年 3 月29日 発行C)

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 ヨシダ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原 5 - 1 - 18

**Archaeological Report
of the
Minami-Sumiyoshi Site in Osaka, Japan**

Volume II

A Report of an Excavation
Prior to the Development of
The Municipal Apartmenthouse complex

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association